

日本音楽教育メディア学会
(JAPANESE MEDIA SOCIETY FOR MUSICAL EDUCATION)

JMSME News Letter

2022.7 vol.15

発行：令和4年7月15日

日本音楽教育メディア学会事務局

〒125-0062 葛飾区青戸5-5-16

メールアドレス info@jmsme.org

ホームページ

<https://jmsme.org/>

ごあいさつ

会長 田中功一（放送大学客員研究員）

皆様、お元気にお過ごしでしょうか。今年は1月のウクライナ情勢から始まり、6月の猛暑と熱中症、そして7月に入りコロナ感染者数の増加傾向などなど、心配事の多い半年だったと思います。この時期、学期末のまとめや夏の諸活動の準備などお忙しい日が続くと思いますが、先生方の益々のご活躍とご健康を心よりお祈りいたします。

さて、本学会は少人数ながら、論文の公開を積極的に進めてまいりました。学会創設時からの著作をホームページに掲載し、先生方の研究成果をその年度内にオープンアクセスにて公開しています。公開により研究の質も評価されますが、オープンアクセスによる公開の流れは世界的に加速していることから、更なる質の向上を目指して公開を進めるのがよろしいかと思えます。オープンアクセスの加速化の例として、話がちょっと飛躍しますが、査読が終わっていない段階の論文（プレプリント）をWeb上で投稿・公開するプレプリントサーバが活気づいているとのこと（2022年03月23日発行 J-STAGE NEWS No.49より）。この機能は本学会には関わりませんが、「メディア」を掲げる学会として「早期のオープンアクセス」を重視していることから、その点では共通する方向性も感じられます。

本学会の論文はJ-STAGEと連携しています。昨年度から本学会の「J-STAGE公開」とする論文が外部査読となり、今後も質の担保に努めてまいります。J-STAGEとの連携により引用文献数や書誌情報閲覧数などアクセス分析が可能になっています。2年前のJ-STAGEニュース（2020年5月）でJ-STAGEの月間アクセス総数が1億アクセスを超えたことが紹介されました。アクセス数以上に、J-STAGEの魅力は早期公開でしょう。本学会冊子は3月末に発刊しますが、査読終了・受理後に論集発刊に先立ってJ-STAGEに早期公開しています。今年3月末の本学会のJ-STAGE掲載論文は残念ながらありませんでしたが、今後の先生方の投稿を期待しています。

本学会の書誌データアクセス数は今年4月の書誌事項が180回、全文PDFが96回、5月の書誌事項が220回、全文PDFが132回でした。

先生方には、ホームページの発信、またはJ-STAGE公開をご活用いただきたいと思います。また、このような発信を通して教育・研究業績づくりをお考えの先生方がいらっしゃいましたら是非お誘い下さい。



日本音楽教育メディア学会 第9回総会・研究会のご案内

日時：2022年8月12日（金）

11：00～12：00 総会

13：00～16：30 研究会

場所：葛飾シンフォニーヒルズ 別館 2階 ビジュアルルーム
会場とオンライン（Zoom）でのハイブリッド開催となります。

参加費：会員無料 非会員 1,000円（事務局に参加お申し込みください）
事務局：info@jmsme.org

♪研究会プログラム♪

- 13：00 「保育における生活や遊びの中での音楽表現についてー表現の助長となる音楽ー」
山口恵美子（東京福祉大学短期大学部）
- 13：30 「保育者養成校の学生の伝承遊びの経験について
ー2019年、2022年実施アンケートを通しての考察ー」
飯泉祐美子（帝京科学大学）
- 14：00 「Scratchによる小学校第3学年の読譜の学習
ー個別最適な学びの視点からの音楽科におけるICT活用ー」
飯泉正人（つくば市立荃崎第一小学校）

休憩

- 14：45～15：30 【レクチャー】
体験談「文献管理ソフト EndNote を活用した論文作成」
田中功一（放送大学）
- 15：45～16：30 情報交換会

~COLUMN~

ピアノ連弾の作品に多く関わるようになって数十年が経つ。今回は、この秋演奏するシューベルトの「人生の嵐」D.947について、筆の赴くままに書いていきたい。

この作品は、シューベルトの亡くなった1828年に書かれており、同じ年に書かれた「ファンタジー」D.940と並んで傑作と称されている。シューベルト31歳の作品である。

作品の構成は、いわゆるソナタの第1楽章に代表されるようなソナタ形式だが、冒頭のモチーフが持つ力強さと、4分音符と8分音符を用いたシューベルトの典型的なリズムから、出版に際して“Lebensströme”（人生の嵐）と題された。第2主題ともいえる旋律は、天国を思われる響きを持ち、テーマとの対照性が印象的である。

シューベルトの連弾作品に触れる度に感じることは、その巧妙な手法だ。シンフォニックな響きを感じさせる部分(T.1-10)と、室内乐的な響きを感じさせる部分(T.12-36)との対比を上手く用いて曲の構成を明確にしながら音楽にメリハリをつけている。更には、シューベルト独自の調性感を、プリモとセコンドのダイアログを用いながら展開させていく部分(T.43-58)などは、実に念に入っている。また、音の配置においても無駄がなく、連弾曲にありがちなオクターブやユニゾンの多用が非常にそつなく用いられ、展開部のほとんどがそれによって書かれている(T.267-287)。また、バスのパートが一貫してユニゾンのシンコペーションで書かれている第2主題は、同一リズムの反復からくる緊張感の上に、悠々たる静寂を醸し出している(T.81-178)。

シューベルトの連弾のパートナーは誰であったのか。もちろんシューベルティアードの仲間であることは確かだろうが、いつも決まった相手との演奏だったのだろうか。56曲もの連弾曲を残したのは、単に音楽的興味からだったのだろうか。

武蔵野音楽大学 森永美穂子

連載「子どものうた」

児童文化財としての明治期の唱歌

明治期に誕生した「唱歌」は、子どもたちにとって「芸術」という対象というより、人間教育のツールであったため、「思想」や「教訓」、「生活習慣」、「教え」、「日本国土や風景」などが歌詞として採用されていた。当然のことながら「感性」の助長には遠い存在のものが多かった。

今日まで歌い継がれている明治期の唱歌は、その数は少なくなったものの、多くのものは、義務教育課程における歌唱共通教材として、学校教育現場を通して歌い継がれている。これらからは前述のような無味乾燥なものではなく、情感あふれる歌詞、メロディを伺うことができる「感性」の育みを期待できる内容のものである。

つまり、だからこそ歌い継がれてきたといっても過言ではない。

さて、明治期以前の日本は、西洋の音楽と無縁の国家であったため「音楽芸術」を「美的なもの」と捉える発想や思想が乏しい国家であった。1800年代前半すでに西洋では、芸術が著しく華やかに進化しており、芸術文化としての華やかさや美的なものを求める時代であったが、日本はその面においては完全に遅れを取っていた。いやはや、知ることができない世界であったという方が正しい。

かつての我が国の人々の暮らしは生きるために働き、働くことが生きることのすべてであったからである。即ち子どもたちは年少の頃から労働を強いられ、大人が子どもの「心」の成長を考えるなど、考えられにくかった。

しかし、明治30年代に入り、人々の暮らしは一変し、外国の資本が入り、給与所得者が増えた。これにより生活に余裕ができ、子どもへの教育の関心が高まった。すると、「子どもの感性の助長には優れた文化が良い影響を及ぼす」と考える風潮ができ、同時期に文学界では「子どもたちの心に残る詩を提供しよう」という動きがあり、さまざまな「詩集」が発表された。

「文化的な視点から子どもの心を育もう」という、子どもを主体にする考え方の誕生である。

これまで約100年歌い継がれてきた「明治唱歌」。今後は児童文化財として100年200年と歌い継ぐために、今、私たち音楽教育関係者は何をすべきなのだろうか？

帝京科学大学教育人間科学部教授 飯泉祐美子

《会員メッセージ》

小林 田鶴子（神戸女子大学）

先日、妹の高校時代の同窓会があった。そこで、妹の友人が「教員採用試験時にお姉さんに音楽実技レッスンをしてもらって感謝している」と話したそうである。

そのレッスンは、私が大学院を出たばかりの年で、採用試験対策は初めてだった。小学校共通教材をピアノで弾くのが課題だったが、その時「何だ、とても簡単な曲ではないか」と思った事をはっきり覚えている。

この感覚は、曲の難易度でいわゆる技能のレベルをはかる、「演奏家養成」の視点である。

その後、教育現場を見るにつけ、こうした視点でレッスンを行ってはならないことを痛感した。そのため、大学教員の公募書類の「大学での授業の抱負」は“「教員養成」のレッスンは「演奏家養成」のそれとは違う”ということを書いてきた。

実際、6年半前の本学赴任時では、非常勤13人中11人がピアニスト。音楽実技テストは、バイエルから始めて、ブルグミュラー、ソナチネと進み、どこまで進んだかで、成績が決まるというシステムだった。これでは、初学者はどんなに頑張っても「優」や「秀」は取れない。また、弾き歌いは、伴奏がメインで、歌は「おまけ」のようだった。これは、実は本学に限った事ではなく、他の大学や短大でも似た状況がある。その原因は、「音楽ができる＝ピアノが弾ける」という「ピアノ中心主義」と、音大卒の教員が大学でレッスンを行う場合が多いことにある。

私はこの状況を6年かけて、やっと、初学者も「優」が取れるシステムに変え、弾き歌いも「歌」がメインになるように、また、今年度からは、試験の内容に「ア・カペラ」も取り入れた。しかし、今年になって、更に気付かされたことがある。

演奏家は、ピアノなどの楽器の前に座ってからが「勝負」だが、教育・保育者は極言すれば、座るまでが「勝負」だということ。つまり、音楽を演奏するまでに子どもたちに興味を抱かせ、音が出た時、どこまで目を輝かせることができるかが重要なのである。

ということで、まだまだ、これからレッスンや試験内容も変えていかななくてはならない。

《会員メッセージ》

林 麻由美（東京福祉大学短期大学部）

気がつけば、今年は社会人になって30年になる区切りの年になります（年がバレますが）。当時はなんとなく、これからピアノを教える仕事をしていくのだな、とは思ってはいましたが、まさか自分が大学教員になるとは考えもしませんでした。振り返ってみると、久しぶりに母校に出向いた際、掲示板でたまたま見つけた保育者養成専門学校の非常勤講師を応募したところからが始まりでした。現在の自分があるのは、様々な貴重な出会いとチャンスに恵まれたのだと、あらためて感じます。これまで自宅や音楽教室などでも、子どもから大人まで幅広い年齢層の生徒さんにレッスンをしてきましたが、保育者養成校の学生達と向き合う時間は特に楽しかったです。中でも指導していたピアノの初心者の学生が短い時間でどんどん弾けるようになっていく姿に、この仕事のやりがいを実感したのも確かです。

もう一つ気がついたことがあります。それは、どうやら自分は人が集まるところが好きであること、またイベント好きであること、何かワイワイやりたい、そんなタイプのようなのです。

今年度も勤務校ではハイブリッドの授業が続いています。自宅でのオンライン授業にすっかり慣れてしまった学生達も、授業内でのキーボードアンサンブルをワイワイ楽しむクラスメートを画面越しに見ているうちに、一人また一人と教室へやって来ます（しめしめ…）。

会員揭示版

数年前から、静岡県立美術館と協働した演奏活動を行っています。オーギュスト・ロダンの彫刻を多数展示しているロダン館という展示室があるのですが、作曲家の長谷川慶岳先生がロダンの彫刻作品にインスパイアされた新曲を作曲し、ロダン館の中で開催されるコンサートで私がそれらの曲を初演しています。

このような試みも8年目を迎え、今年の一つの節目としてCD制作や演奏会の予定がありますのでご紹介させていただきます。美術と音楽とのクロスジャンルな試みとして、いつかこちらでも研究発表させていただければと考えています。

(後藤友香理 静岡大学)



CD 「ロダンをめぐる8つのイメージ ～Yukari GOTO plays Yoshitaka HASEGAWA」
2022年8月下旬発売予定

演奏会 「ロダンと表現者たち ～夜の美術館コンサート～」 2022年9月24日(土) 18:30 開演
静岡県立美術館 ロダン館 出演 後藤友香理(ピアノ) 三島景太(朗読) ほか

演奏会 「リコーダーとサクソフォンでめぐるフランス300年の旅」
2022年11月5日(土) 13:30 開演(予定) 静岡県立美術館 ロダン館
出演 長瀬正典(リコーダー、サクソフォン)、後藤友香理(ピアノ)、長谷川慶岳(作曲)

会費納入のお願い

●今年度(2021年8月1日～2022年7月31日)の年会費(正会員)7,000円、(学生会員)4,000円をお願いいたします。

●来年度(2022年8月1日～2023年7月31日)の年会費の納入は12月末日までをお願いいたします。

《振込先》 ゆうちょ銀行 10510-91267401

他銀行よりお振込みいただく場合：店名 058 店番 058 (普) 912674

二ホンオンガクキョウイクメディアガッカイ

※入会・退会に際しまして、又、会費についてご質問等ございましたら事務局までご相談ください。

事務局だより

記録的な猛暑・酷暑とともに始まった2022年夏、悲しい出来事が続いています。ウクライナの戦禍は未だ収まらず、元総理大臣が凶弾に倒れ、新型コロナの感染は再び広がり始める中、孤立と不安、分断と対立ではなく、多様な他者と共存し、相互理解と共感を支えていくために、今こそ「コミュニケーション」や「聴く力」が求められているのではないのでしょうか。音楽教育もメディアもこれを支えるものだと信じています。私ども事務局スタッフも、引き続き、会員の皆様とのコミュニケーションを大切に、皆様からの声を傾聴しつつ運営にあたって参ります。ご意見、お気づきの点などございましたら、ぜひ事務局までまでお気軽にご連絡ください。(兼古勝史) 事務局：info@jmsme.org